

よみがえれ！
有明訴訟弁護団
(後藤富和)発行
092-512-1636
090-9602-0700

上告論外 期待裏切らないで

12月6日に福岡高等裁判所が国に対して諫早湾干拓事業潮受堤防の開門を命じた判決について、国が上告するかどうかが焦点になっている。有明海沿では、漁業者らの上告しないでの声が湧きあがっている。

何年続けられるか

吉田訓啓(長崎県島原漁協)

あと何年漁業を続けられるか。(以下、12月7日・長崎新聞より)

「今の状態がどんだのはず」と毎年思う。だが、海は年々悪くなる。「魚は減っているのに、魚価は低迷。資材や燃料は高騰。生活はもう限界」と悲鳴を上げる。

島原市によると、諫干着工時の1989年、市内の漁獲量(藻類含む)は2523トンだったが、2008年には約4割の987トンまで落ち込んだ。漁場では近年、貧酸素水塊や赤潮が多発し、仕掛けした漁網が海底にたまった泥で汚れることもある。

「潮受け堤防の閉め切り以降、潮の流れがよどんだ。漁場環境が悪化した原因は諫干しか考えられない」と言い切る。

昨年夏、民主党政権が誕生し、開門への期待が一気に高まったが、足

踏み状態が続く。

地元の長崎県は開門に反対の立場だ。「開門を求める自分たちは『県民』ではないのか」と憤り、「漁業と農業の共生のため、本来なら判決が出る前に開門を政治判断してほしかった」と語る。「一審の時は国が控訴しないよう農水省前で座り込みした。有明海の再生は待たなした。」

国は上告せず、一刻も早く開門を実現してほしい」と静かに話した。



裏切られたとの思い

田中和利(福岡県中島漁協)

一日も早く開門を。今までも開門に向けて状況が良くなるかと思うと一歩も二歩も後退するような目に何度もあった。今年も4月の段階では開門まで行くかと思ったが、口蹄疫問題、内閣改造、そこから開門が遠のいた。その繰り返しはもう嫌だ。(以下、12月7日・西日本新聞より)

小学生のころは近くの矢部川河口でシジミを採り、中学、高校生のころは近くの干潟で採ったアサリを売って小遣いを稼いだという田中さん。高校卒業後は代々続く漁業に就き、約30年間ノリ養殖に携わってきた。しかし、潮受け堤防が閉め切られた1997年4月以降は、ノリの色落ちや赤潮の発生が続出。2000年の記録的な不作時には収入が

平年の5分の1に落ち込んだという。排水門の即時開門を主張していた民主党が政権を取った後も事態は変わらず、「裏切られた」との思いを募らせる。「私たちの税金を使った国営事業でなぜ、生活がおびやかされるのでしょうか」中2と小6の2人の息子に、後を継ぐかどうか聞いたことはないという。「私が父の後を継いだように子どもたちにも継いでほしいが、今の海の状況では、大きな不安がある。これ以上、海が荒らされないように、国は一日も早く開門を実現してほしい」と訴えた。

上告しないで欲しい

西田竜治(福岡県大和漁協)

仮に政府が開門を口にしなから上告するというのであれば信用できない。そうなると、菅総理も民主党も信用できない。(以下、12月7日・西日本新聞) 13年間待ち望んだ朗報だ。海面近くで養殖を行うノリは海水が入れ替わることですぐに立ち直る。色落ちや赤潮も減るのではないかと。国は非を認めて上告しないで欲しい。

上告と開門は矛盾

松本正明(長崎県有明漁協)

上告して開門というのは、二股かけているようなもの。2012年に絶対に開門すると一筆書いて確約するならば信じよう。でも、今の時点で上告しておいて、2年先に開門というのは信用できない。開門する気があるのなら上告すべきでない。これまでも「開門」が現実化すると国は委員会を作って決断を先延ばししてきた。これまでのことを考えると信用できない。確約できないならば、来春に開門すべきだ。(以下、12月9日・長崎新聞) 「開門方針を固めながら上告を検討するのは矛盾だ」と農水省を批判。「2年後」と言わず、来春から開放してほしい。上告せず準備を進めるべきだ」と語気を強めた。